



矢野道雄 著  
インド数学の発想  
IT大国の源流をたどる



NHK出版 2011

本の出版は出版社の編集担当者と著者の共同作業である。今回の出版ではとくにこのことを強く感じた。

NHK 出版社の高井健太郎さんからインドの数学について一般読者向けに新書を書く事を依頼されたのは3年以上も前のことであった。インドがIT大国としてにわか注目を浴びようになり、その背景には独特の数学教育があるのではないかということで、インドの算数や計算法の本が書店で平積みされるようになっていた頃である。しかしわたしはインドの数学よりも天文学と占星術の歴史を専門としており、数学に関してはすでに林隆夫氏の『インドの数学：ゼロの発明』（中央公論新社、1993）という立派な本があるので執筆を躊躇し、なかなか腰をあげることができなかった。ところが高井さんは2010年6月にわたしが本学の「市民講座」で行った「IT大国インドの歴史的背景」と題する講演を聞きに来て、この講演の内容をふくらませるだけでいいと言われた。わたしはどちらかというと古代・中世の文献のほうに関心があり、現代インドには疎かったので、その前後の2年足らずの間に5回インドへ行く機会があったのを利用して、できるだけ本書に取り入れることのできるような情報を集めることにした。簡単に言えば、昔のインドの数理的な文化が現代にも生きている様子を知りたかったのである。その極みが2011年4月初旬に南インドで行われた「アグイチャヤナ祭式」の見学である。本書の最終ゲラをメールで受け取った日にインドへ出発し、空港・機内・現地のホテルで校正し、何回も高井さんとメールと電話でやりとりをし、最後の節と「おわりに」も祭場近くのホテルで書いた。

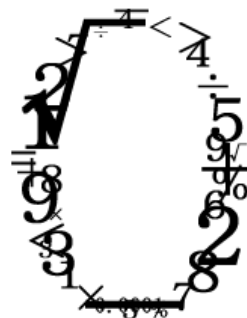
この祭式に関わる祭壇構築のための幾何学はいまから三千年ほど前に起こったものであるが、昔の文献の規定通りに羽根を広げた鷲の形の祭壇が築かれるのを目の当たりにして報告することができた。祭壇構築の手引書である『シュルバ・スートラ』については本書の第4章に書いた。

わたしは以前から「インド文化を古代と現代から相互照射する」という表現を使っていた。長く連続した歴史をもつインド亜大陸の文化をよりよくとらえるためには、古代の文化を見た目で現代を眺めると同時に、現代の文化を遡って古代の文化を見ることが必要であると思っているからである。したがって本書も時代の流れに沿って歴史的に叙述するという手法をとらず、全8章にわたって視点を過去と現代の両方におくことにした。さらに高井さんの助言により、できるだけ各章の冒頭で現代の状況を述べ、その後でこのような現状にはこのような時代的な背景があったのですよ、という語り口にした。

このように読みやすいものにしたつもりであるが、数学・数理天文学・暦が中心的なテーマなので、数式を用いないわけにはいかなかった。これについても高井さんは一人の読者として熱心に原稿を読み、たくさんの質問をして下さった。「こんなことがわからないのか」と思ったこともあったが、後で考えると、わたしにとっては当たり前でも、普通の読者にはわかりにくいものであった。

文化には様々なとらえかたがあるが、本書は数理科学という新たな視点を提供したものである。「文理相互照射」からインド文化を見ていただければ幸いである。

(やの みちお 文化学部教員)



カット 井手 慎吾

(経済学部 4年次生)



# 永田和宏 著 もうすぐ夏至だ



白水社 2011

単著としては私のはじめてのエッセイ集ということになる。

第一部は、私の生い立ちや父のこと、また歌人であり妻でもあった河野裕子の、死にむかう最後の日々についても書いている。第二部は、日経新聞や京都新聞で連載したエッセイを収め、第三部には、まだ未熟なものながら、若干の教育論的なものをエッセイ風にまとめた。京都産業大学の学歌について書いたもの(「入学式とひきがえる」)や、総合生命科学部における、私なりの教育理念について書いたもの(「『何がわかっていないのか』を教えたい」)もある。

私自身は「もうすぐ夏至だ」「歌は遣り歌に私は」「後の日々」の三編からなる、妻の死について書いた章に愛着が深い。

一日が過ぎれば一日減ってゆく君との時間  
もうすぐ夏至だ

河野裕子は、歌人として、文字通り最後の最後まで、死の前日まで歌を作り続けた。与謝野晶子以来と誰もが認める存在であったが、ある時乳癌が見つかり、それが再発することで、自らの生の時間が否応なく断たれることになってしまった。

「死までの時間」が見えてきたとき、人間はどのように生きるものなのであろうか。最後の数カ月をどのように過ごすかは、例外なく死なねばならぬ人間という存在にとって、何人も避けて通ることのできない問いである。

死に臨んで、人間はもっとも自分らしく生き切りたいと願うだろう。しかし、もっとも自分らしく生きるとはどういうことか。改めて考えてみると、もっとも自分らしいとは何かという問いほどむずかしいものはない。

河野裕子にとって、もっとも自分らしいとは、歌人として歌を作り続けることに他ならなかった。だから死のぎりぎりまで歌を作り続けることが自分らしい生を全うすることに他ならず、それがもっとも精神的に安定していられるということでもあったのであろう。最期の歌は

手をのべてあなたとあなたに触れたきに息  
が足りないこの世の息が

であった。生の最後の歌として、近代以降でも突出した一首である。この一首も凄いが個人的には、長生きして欲しいと誰彼数へつつひにはあなたひとりを数ふ

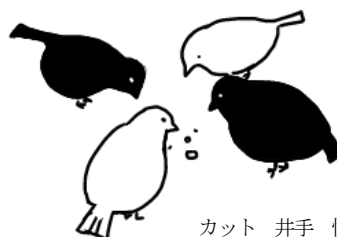
という一首が私には切ない。誰もに長生きしてほしいと思うが、それを数え上げれば、結局、私にとってはあなただけ。あなたにだけは長生きして欲しいと、詠うのである。こういうバトンの渡され方は、辛いものである。辛いがそれが妻の死後の私を支えているものであることは確かである。

本書の装丁は、菊地信義さん。著名な装丁家であるが、私の『もうすぐ夏至だ』のあと、河野裕子のエッセイ集『わたしはここよ』(白水社、2011)の装丁もしていただいた。その本を見た時、思わずあっと声が出た。二冊は見事な対称性のなかに装丁がなされていたのである。

この装丁を見て、ふらふらと買った人がいた。それが映画監督の是枝裕和さんであった。「誰も知らない」では十五歳の少年がカンヌ映画祭で主演男優賞を取った。是枝さんは装丁に惹かれて買ったのだそうだが、本書の内容を新聞やテレビで紹介してくれ、個人的な付き合いにまで発展して、おもしろい友人を持つことになった。

本書の数編がNHK ラジオで朗読されたり、またさっそく、今年の大阪市大の国語の入学試験問題になっていたりしたのは、驚きもし、またうれしくも思ったことだった。

(ながた かずひろ 総合生命科学部教員)



カット 井手 慎吾

(経済学部 4年次生)



高山秀三 著

## マンと三島 ナルシスの愛



鳥影社 2011

三島由紀夫は日本文学にも外国文学にもこれ以上ないほど精通した作家だった。その三島が、「今世紀の作家で、やはり私がもっとも傾倒する作家はトーマス・マン」であり、「トーマス・マンはやっぱり世界第一の作家だと思ふ」と語っている。三島はマンに熱烈な共感を抱き、少なくともその最も創造性に満ちた時期にあつては、この作家をみずからの生と文学の規範として生きた。たとえば、最高傑作と評される『金閣寺』の文体について、三島は、「鷗外プラス、トオマス・マン」の文体を目指したと説明している。三島が日本の作家として最も敬愛していた森鷗外と、世界文学の最高峰と仰いでいたマンへの傾倒がこの傑作を生んだと語っているのである。

鷗外への憧れが、自分とは異質な、父性的なものへの憧れであつたのに対して、三島がマンに抱いていた憧れは、むしろ自分と同質であつて、しかも偉大さと呼べるものに到達した人への憧れだつた。三島由紀夫とトーマス・マンに共通する顕著な性格的特質は、その巨大なナルシズムである。ナルシズムというと、自分に満足しきつた、夜郎自大な自惚れを思い浮かべる向きが多いかもしれないが、ナルシズムの背後にはしばしば自分自身の存在にまつわるつよい不安感や虚無感がはりついている。マンや三島のナルシズムは、生への不安、他者と触れあふことへの不安と密かに連関していた。かれらの小説は、絶えざる自己注視の産物という側面をもっている。

そこにはナルシズムと表裏一体の空虚感や孤独への怖れが濃い影を落としている。

人と人との関わりを突きつめて考えようとするとき、ナルシズムは見過ごすことのできない現象である。他者を思い、その存在をもとめることを愛と呼ぶとすれば、愛もまた、実はナルシズムの延長線上の現象であると考えることができる。そうした観点において、マンはナルシズムこそは愛の基盤であると主張し、それを愛の能力そのものとして肯定した。マンはナルシズムをふつうそう考えら

れているような関係の障害とは認めず、むしろ愛の能力と見なし、ナルシストであるおのれを肯定したのである。八十歳まで生きたマンの長命は、ある程度こうした考え方に支えられていた。しかし、ギリシャ神話のナルシスが死を運命づけられていたことが示すように、ナルシズムは本来的には死に向かう衝動である。三島由紀夫の壮絶な最期は徹底したナルシズムの帰結として理解される。三島はマンに倣っていったんはナルシズムを肯定し人生を肯定する態勢を選びとるが、やがてその無理に耐え得ぬかのように、自己破壊的な衝動に身を委ねていった。三島において、ナルシズムは他者と関わることへの無能力そのものである生の砂漠となつた。

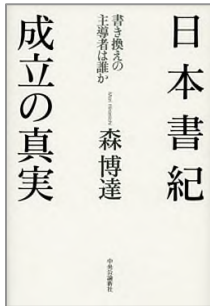
ナルシズムは芸術家をはじめとする創造的な人間がとりわけ濃厚にもつ特性である。みずからの仕事に陶醉する気質がなければ、創造という困難な作業に耐えることはできない。トーマス・マンと三島由紀夫の生涯を眺めるとき、天才的な人間が抱えるナルシズムの栄光と悲慘が鮮明に浮かび上がってくる。

(たかやま しゅうぞう 外国語学部教員)



カット 井手 慎吾

(経済学部 4年次生)



# 森博達 著

## 日本書紀成立の真実

### 書き換の主導者は誰か



中央公論新社 2011

いきなりで恐縮ですが、学問とは何でしょう。実事求是、事実に基づき正解を求めることだと、私は思います。学問の虚実の判別は簡単です。事実の発見を伴っているか否か。それが試金石です。

日本最高の古典は『日本書紀』(30巻、720年撰)です。書紀が無ければ、7世紀(697年)以前の日本の歴史は分かりません。坂本太郎は、「記紀で研究する前に、記紀を研究せねばならぬ」と言いました。至言です。書紀を研究するためには、その表記と言葉の研究が不可欠です。

書紀30巻は漢文で書かれており、その中に万葉仮名(音訳漢字)による歌謡が128首も載せられています。私は中国語音韻学を専攻しており、大学3年生で書紀の万葉仮名に興味をもちました。その研究の成果が『古代の音韻と日本書紀の成立』(大修館書店、1991年、金田一京助賞受賞)です。さらに文章論・編修論に進み、『日本書紀の謎を解く一述作者は誰か―』(中央公論新社、1999年、毎日出版文化賞受賞)を著しました。

私見では、書紀30巻はα群(巻14~21・24~27)、β群(巻1~13・22~23・28~29)、巻30に三分されます。α群は唐人が正音・正格漢文で執筆し、β群は倭人が倭音・和化漢文で述作しました。その後、書紀編修の最終段階で巻30「持統紀」が述作され、同時に漢籍による潤色と記事への加筆が行われました。「持統紀」の文章は倭習が少なく、潤色・加筆の文章には倭習が目立っています。

拙著では述作・編修の時期や執筆者の姓名まで推定しました。また書紀の文章を分析して、記事の虚実の判別にまで及びました。「十七条憲法」は聖徳太子の真作ではありません。「大化改新」は編修の最終段階における後人の加筆です。書紀の研究は新しい局面を迎えたのです。

今回の拙著は5章から成っています。

第一章「日本書紀の研究方法与今後の課題」は前著のまとめが中心です。第二章「日本書紀答記」は前著の各章を発展させたもの。研究論・音韻論・文章論・編修論の各分野で発見がありました。

第三章「日本書紀と古代韓国漢字文化」は韓国の学会で発表したもの。前著執筆中、「次は韓国だ」と思い決めました。ソウルで1年間韓国語を学習して、今年で10年が経ちます。書紀はβ群を中心として韓国古代の漢字文化の影響を受けています。

第四章と第五章は今回書き下ろしたものです。第四章「書紀研究の新展開」は主に前著以後、各分野で進展した書紀研究の紹介と検討。文章論・天文学・出典論等の新たな成果によって、書紀の実態が一層明らかになりました。かつて孤独であったα群・β群の論は広く深く浸透してきました。

第五章「書紀成立論」は書紀の文章を分析して、編纂の主導者を推定したものです。書紀の編纂は国家の大事業でした。編修方針の決定や原史料の選定は、政治的に有力な日本人が主導したに違いありません。本章では、α群なのに倭習が集中する記事を分析して、編纂の主導者を特定しました。

書紀区分論は難しくありません。漢和辞典というツルハシー一本で着手できます。この豊かな金鉱の見取り図はすでに提供されています。百の妄想より一グラムの純金です。多くの方々に事実を掘り出す喜びを味わって頂きたいと願っています。

(もり ひろみち 外国語学部教員)



カット 井手 慎吾

(経済学部 4年次生)